表す 感じる

かほく防災記者 1・2期生リポート

秀光中3年　大橋　乃子さん

天文台、職員一丸で備え

大橋乃子さん

かほく防災記者としてこれまで東日本大震災の遺構や地域の災害リスク、家庭や学校の備えについてリポートしてきた。今回は身近な施設の防災対策を知りたいと思い、9月23日に仙台市青葉区錦ケ丘にある仙台市天文台を取材した。天文台の建設に関わり、災害対策本部長も務めるマネジャーの船田利広さん(67)が対応してくれた。

天文台は大きく分けて大型望遠鏡、展示室、プラネタリウムで構成されている。東日本大震災で、最も大きな被害を受けたのは大型望遠鏡だった。震災発生時、近くに人はおらず、人的な被害がなかった一方で、見たい星を自動でとらえる制御装置などが壊れてしまい、修理に1年近くかかったという。

建物自体は耐震性が高く、揺れの被害はほとんどなかった。展示室も模型などをしっかりと固定していたため、影響は少なく、1カ月ほどで復旧できた。プラネタリウムは、地震が起きた時に上映中で、ほぼ満席だったが、厚さ30センチの壁や揺れに強いドーム型の構造により全員無事だった。

船田さんは、震災で被害を防ぐことができたもう一つの理由について「タイムテーブルを作って災害発生後の対応を時系列で決めていたことや、職員の防災訓練も役に立った」と話していた。

現在も天文台全体の訓練を年に2回実施しているほか、震災の経験を基により迅速に避難誘導できるようにタイムテーブルを見直したと聞き、大きな地震が起きても安心だと思った。

「今後も職員の訓練を重ねるほか、揺れを吸収する設備や防災備品の点検、避難の動線の確保などに取り組んでいく」と船田さん。目に見えないところで、さまざまな災害対策がとられていることが分かったとともに、事前に備えることの大切さを改めて学んだ。

◇

本年度3期生が研修をしているかほく防災記者（河北新報社主催）の1期生、2期生が、災害や防災・減災に関するテーマを選び、取材、執筆したリポートを随時紹介します。

展示室は重いものをつるすため頑丈(がんじょう)に設計されていた

募集中

「3.11からの独り言」

河北新報社は震災13年の取り組みとして、東日本大震災を経験して感じたこと、心に残っている場面などを、おおよそ五・七・五でつづった短文「独り言」を募集します。地震や津波のこと、復興のこと、支援のこと、思い出せる人は短文を作成して、記憶を記録するとともに、応募してみませんか。

寄せられた独り言は河北新報オンラインなどで紹介する予定です。

応募方法
- 専用の入力フォームで受け付けます。締め切りは2024年1月31日
- 河北新報オンラインのピックアップか右記の二次元コードから接続してください
- 連絡先　防災・教育室 022(211)1591　メール　hitorigoto@po.kahoku.co.jp

頑張って って何を 頑張るの
お隣が 静かになれば 心配に
役に立つ 防災グッズ 持ち出せず
安否確認 手間増えた
知りません 簡易トイレの 使い方
我が家では 震災前に 何もせず 家族無事は 偶然だ
越したばり
一つの正解 求められても 持ってません
炊き出しの 味れナグッド おらしょっぺー
名前出ず 相づち打てば 会話成る
入れ歯なく 食べることまで ストレスに